

高田吉岳大尉のことなど

案野照彦

(賛助会員・福岡県春日市)

「陸軍墓地に、陸軍大尉・高田吉岳警備隊司令ほか百三十四柱の墓碑……」の記事中(一三三三号三七頁)

高田吉岳は元小倉藩士、当時豊津士族で、熊本城解圍後、官軍の兵力不足を補うために編成した志願士族隊の警備隊三箇小隊長で、当時は「司令」と呼称していた。

吉岳の戦死場所は大原越の蛇葛山で、明治十年八月六日、警備隊員十三名が戦死した。

状況は「熊本鎮台日誌(記)」、或は案浦著『兵旅の賦』明治・大正篇にある。

吉岳の先祖は、槍の名人高田又兵衛吉次、号を宗白七百石取。宮本武蔵と引き分けの勝負をしたと伝えられる。

◆ 鶴見町役場から「丹賀三十七センチ砲塔復元についての問い合わせ」に関して

軍隊拒否の戦後の風潮なれど郷土史的には、現今のミ

サイル時代に比較すると、それなりにとりあげてもおかしくない時代に来ていると思う。

佐伯には佐伯航空隊があった。航空隊に在隊し、敗戦後住みついた方も居られると思う。今のうちに纏めておかないと、ある意味で空白の歴史となるのではないか。戦争と直結して考えるから妙になるので、在隊者や航空隊そのものには何の罪もなく、むしろ被害者でもある。

かく書いている私も、往年十五才で志願し、真珠湾攻撃の特殊潜航艇と同じものに塔乗した一員です。

学業を放置してとび出さざるを得なかった。愛国とか、忠誠心ではなくて、戦わないと勝たないとの気持でいっぱいであった。今の金権の世相とは異なる時代かも知れないが、その時代に生きたことには違いない。

それを後世に残し、一つの教訓とする。郷土史とは本来そのようなものと思う。善悪の倫理感ばかりでは、結局曲った歴史を残すのではないか。兵旅の賦は血税を払った諸人の記録との意味である。